

01 マイルカ・カマイルカ漁の民族考古学

平口哲夫（金沢医科大学）

Ethnoarchaeological investigations of common dolphin and Pacific white-sided dolphin hunting in Japan.

Tetsuo Hiraguchi (Kanazawa Medical University)

一般にイルカの追い込み漁では特別の道具を必要としないため、イルカの骨が遺跡から出土しても、漂着個体を利用したにすぎないのか、それとも積極的に捕獲した結果なのかを判断するのはむずかしい。石川県能都町真脇遺跡で縄文時代イルカ漁を証明することができたのは、当遺跡のみならず、その位置する能登半島・富山湾沿岸地域が民族考古学的あるいは動物考古学的にいくつかの好条件を備えていたからである。真脇遺跡出土の哺乳動物個体数のおよそ90%（286個体以上）がイルカで占められているということも好条件の一つに違いないが、集団漂着のことを考えるならば、多量出土だけではイルカ漁の直接証拠にはならない。

真脇遺跡でイルカ骨がもっとも多く出土したI区XI層（縄文前期後葉～中期前葉、約5000年前）のイルカ種構成は、第一頸椎によれば、カマイルカ60%、マイルカ34%、ハンドウイルカ・ゴンドウクジラ類6%である。マイルカならば追い込み漁で捕獲しやすいが、カマイルカは、包囲網を突破する能力を持っているので、いまでも追い込み漁で捕獲するのは効率的ではない。享保（1716～1736）元文（1736～1741）年間に書かれた『前田本草』には、カマイルカについて「網を懸け申候てもとまり不申候 もりなどにて突取申候事に御座候」とある。つまり、カマイルカは網で捕獲するのはむずかしいから、鉾などで突いてとるのがよいと言っているのである。

真脇遺跡では、北陸の縄文時代前期～晩期遺跡としては異常に多く石槍が出土している。イルカ骨がもっとも多く出土したI区XI層では、主要石器に占める石槍の出現率が他の層に比べて最高の62%を占める。ちなみに外浦に面する富来町福浦港ヘラソ遺跡の同時期層では石槍はわずか1.3%を占めるにすぎない。一方、富山県氷見市朝日貝塚では、種同定された22個体のイルカ第一頸椎のうち、マイルカが77%、カマイルカが14%を占め、それに呼応するように石槍はほとんど出土していない。したがって真脇縄文人は、少なくともカマイルカにたいしては、ある程度追い込んだ段階で石槍で突くという方法を用いたと考えられる。

真脇では、天保9年（1838）に書かれた『能登採魚図絵』が示すように、近世においても「いるか廻し」と呼ばれる追い込み漁が盛んに行われており、毎年きまった季節にイルカが群をなして沿岸に回遊してきた。しかも、能登半島における漂着鯨類の分布をみると、外浦（日本海側）には文字通り漂着が多いが、内浦（富山湾側）は定置網による混獲が多い。どちらの側においても集団漂着の例はなく、単独漂着ばかりだということに注目したい。

真脇に伝わる「藤の花の咲く頃」（5月頃）のイルカ漁期はカマイルカ回遊期に一致する。大正頃（1910年代）の絵葉書に、真脇に隣接する内浦町小木のマイルカ漁を写したものがある。マイルカはカマイルカの場合よりも水温が高くなってから回遊してくる。外洋性といわれるマイルカが、富山湾奥に位置する朝日貝塚からまとまって出土、また七尾湾最奥に面する石川県田鶴浜町三引遺跡からも出土している。東京湾沿岸地域では、縄文時代遺跡から出土するイルカはカマイルカよりもマイルカである場合が多い。ところが海棲哺乳類情報データベースによれば、1960年1月～1999年12月のマイルカ情報は44例にすぎず、しかも25例（56.8%）は日本海側であり、太平洋側は17例（38.6%）にとどまる。ちなみに、同期間のカマイルカ情報は221例、日本海側166例（75.1%）、太平洋側55例（24.9%）である。つまり、かつてその名の示すように沿海で普通に見られたマイルカが、現在ではあまり見かけない状況になってしまったということになる。